

桂坂だより 特別号



令和6年2月2日
京都市立桂坂小学校
校長 上田 昭宏

＜学校教育目標＞『人と豊かにかかわり 共に学び未来を創りあげる 桂坂の子』

令和5年度 全国学力・学習状況調査の結果より

全国の中学生3年生・小学生6年生を対象に実施された「全国学力・学習状況調査」(令和5年4月)の結果について、12月に京都市教育委員会からその状況について報告がありました。本調査では、「国語」「算数」の2教科のテストとともに、家庭での過ごし方や児童の学習に対する意識等を問う「生活習慣や学習環境等に関する質問紙調査」も実施されました。その結果について京都市の状況と比較しながら、本校6年生児童の学力と生活習慣の関係などの状況について分析し、まとめたものをお伝えさせていただきます。

総合結果（国語科・算数科）

本校児童の結果を平均正答率の値で比較すると、国語科では京都市を1%、全国を5%、算数科では京都市を2%、全国を6%、上回っていました。正答数分布グラフでは、2教科とも標準的な山型が見られ、児童の学力の分布にあまり偏りがないと考えられます。また、2つの教科の内容についての分析では、評価の観点で京都市・全国の結果と比較すると、「知識・技能」の面で大きく上回っていました。「思考・判断・表現」面でも平均正答率において京都市・全国を上回っており、バランスよく良好な結果になっていると言えます。

また、問題形式においては、選択式・短答式・記述式を問わず、全国の平均正答率を上回っていました。さらに、無回答率も2教科ともほとんどの設問において全国平均を下回る結果となっており、児童が最後まであきらめずに回答しようと取り組んだ姿勢がうかがえます。一方で、国語科でも算数科でも、自分の考えを記述する問題については無回答率がやや高くなっています。この傾向は、夏休み後に実施したジョイントプログラムの結果にも見られます。これらの結果から、学習の中で自分の考えをノート等に記述することに対して抵抗なく臨めるよう、児童が主体的に思考を伴った問題解決を進められるような授業づくりを、さらに進めていく必要があると考えています。

国語科について

＜正答率…本校平均：72% 京都市平均：71% 全国平均：67.2% ＞

国語科では特に、「知識・技能」の観点の「漢字を文の中で正しく使うことができるかどうか」の力を見る問題で全国・京都府の平均の正答率を上回りました。一方で、ジョイントプログラムにおいては、「漢字を読む」の内容の問題は京都市平均を上回っていましたが、「漢字を書く」内容の問題での正答率が京都市平均を若干下回っていました。漢字を正しく使う力については、できていることを確認しながら継続的に学習を積み重ねていきたいと思います。

問題ごとの分析では、京都市教育委員会の分析と同様に「書くこと」の領域がその他の領域（「話すこと・聞くこと」「読むこと」「言語の特徴や使い方に関する事項」等）と比較すると正答率がやや低いと言えます。

問題例では「米作りについて解説する文章を書く」問題で、いくつかの条件を満たした文章を書くという設問がありました。「グラフからわかること」「インタビューした内容からわかること」「友達の意見に触れる」「60字以上100字以内」のすべての条件を満たすと正答になる問題では、文字数の条件はほとんどの児童が満たしていましたが、記述する内容の条件を満たさず、正答にならない児童が多くいました。

授業の中で、自分の考えを書く機会は、頻繁にありますが、様々な資料からわかることや、友達の意見を踏まえて考えたことなど、自分の考えの根拠になることについても、丁寧に記述できるように、日々の学習の積み重ねの中で指導していきたいと思います。



算数科について

＜正答率…本校平均：69% 京都市平均：67% 全国平均：62.5% ＞

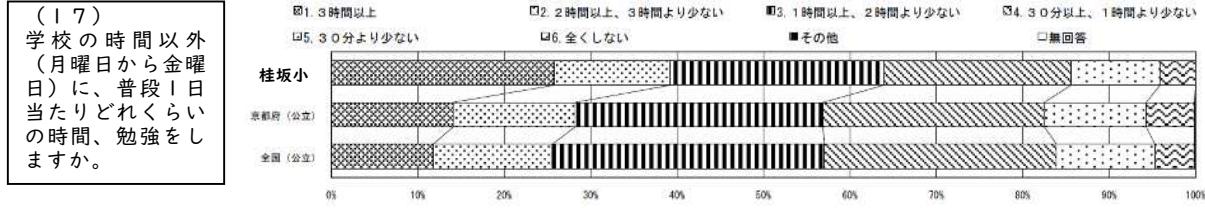
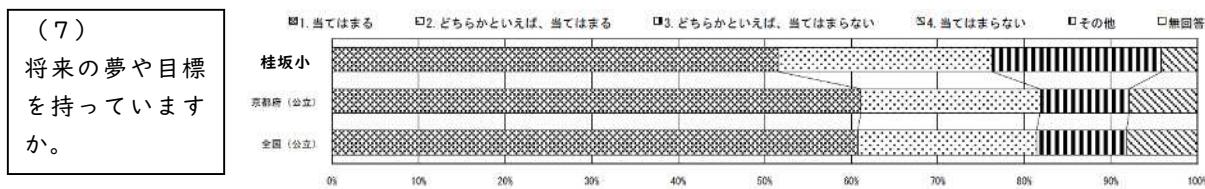
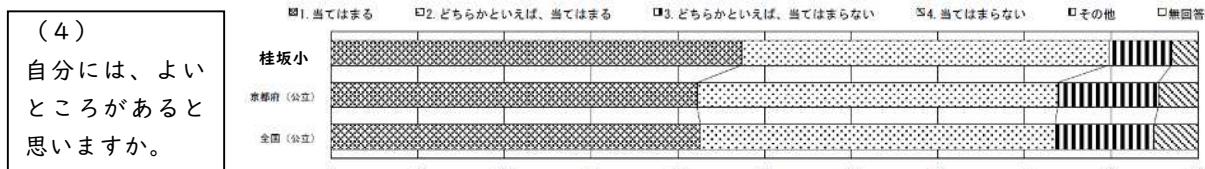
算数科においても国語科と傾向が似ており、評価の観点別では「知識・理科」の方が「思考・判断・表現」の問題での正答率より割合が高い傾向にありました。特に、「百分率で表された割合について理解しているかどうかを見る」問題では、京都府・全国の正答率を約14%上回りました。その他、比例を用いた問題、「三角形の底辺と面積の関係をもとに面積の大小について判断して記述する」問題でも正答率が高い傾向にありました。

領域別では、全国・京都市の傾向と同様に、「図形」に関する問題での正答率が低い傾向にありました。今回の問題ではテープから図形を切り出していく過程で出てくる様々な問題を問うものでした。本調査の問題は、例年、公式や数値だけの出題ではなく、日常生活や実用的な問題を取り上げる傾向にあります。問題と答えの一対一対応ではなく、設問の中の問題を自分で見つけ、条件を吟味して答えを導き出すという、より実生活に即した算数科の学習を展開していく必要があると感じています。



児童質問紙調査より

児童質問紙調査の中から桂坂小学校の傾向が顕著に表れていた項目を紹介します。



(4)の質問の回答からは、当てはると答えた児童の割合が特に多く、本校児童は「自己肯定感が高い」ということが言えます。一方で(7)の質問では将来の夢や目標について、持てていると回答する児童の割合が京都府・全国平均より低いことがわかります。また、(17)の質問からは、児童が学校以外の時間にたくさんの勉強をしている傾向にあることも分かります。目標が定まらない中で勉強に取り組み、学校生活においていろいろな迷走を持っている児童が多くいるのではないかと推測されます。日常の中でやりがいを感じられる取組等の機会を作り、今後も児童の自己有用感を高めていき、目標や夢につなげていきたいと考えています。

おわりに

授業の中で児童に「多様なテキストを的確に読み取る」「他者と協働し、関連付けて考える」「再構成した学びを表現する」力をつけ、習得した学習内容を生活に活用できるようしていくことが、重要なことを、今回の調査からも再確認することができました。本校の授業づくりにおいても、児童が仲間と楽しみながら学習を進め、思考力・判断力を伴った知識や技能を獲得し、日常生活に生かしていけるような学習活動をすすめていきたいと考えています。

